

がんばりたいきもち

広島県立呉南特別支援学校

中学部第3学年 森 圭吾

がんばりたいきもち

呉南特別支援学校 中学部 三年

木

圭吾

ぼくは、おかあさんのことが大好きです。
おかあさんは、やさしいです。ぼくは、おか
あさんのことが大好きなので、おかあさんに
あえないとよいでしまいます。小学ぶらねん
せいのしゅくはくはく学しゅく、小学ぶらねんせ
いのしゅく学りょこのときは、さみしくつ
ないてしまいました。きょうねんのしゅく
はく学しゅくのときは、大じゅくでした。
なれたのかなとおもいました。

ことは、中学ぶのしゅく学りょこのことがあ
りました。バスで、かがおけんにいきました。
はじめのうちはくろ日でした。でも、きょう
んはなかがたから、大じゅくがかなとお
もいました。しゅく学りょこの日にいく日、お
かあさんが学りょこのみおくりにきました。
いえでも、みおくりのときも、おかあさんは
ぼくに、

「大じゅんぎょ。」

と聞いてました。ほくほ、ふあんのほうがかっ
ていました。

一日め、みんなで四ノく水でくかんやうち
あぶり、ゴールドタワーにいったのし
くすおしました。やるごはんのと き、おかあ
さんにあいたくて、きもちがあがったりさか
ったりしました。おふろがおあがりから、お
かあさんにでんあをしました。ほくほ、なに
をしたかをはなしました。なきませんでした。

二日め、レオマワールドにいきました。や
うがた、こんぴらさんのほって、やるごは
んをたべました。また、きもちがあがったり
さがたりしました。おふろにはいって、お
かあさんにでんあをしました。おかあさんが、
コラどんをかっきてあ。

と聞いてました。ほくほは大じゅんぎょでしたが、
レオマワールドやこんぴらさんのはなしをし
ていて、だんだんなみだがあがってきそうに
なりました。なみだをふさコラとしたけど、

なみだがかちました。たくさんなきました。

おかあさんが、

「ながんのんよ。」

といいました。それから、なきながら、

「おかあさんにあいたい。」

となんかいもいきました。さいごに、

「あした、あえるけんね。がんばるけんね。」

「なくのを、どうにかがまんしてみろね。」

という、7かんちをきりました。7かんちをきら

ても、まだなみだはつづいていました。その

あと、テレビをみているうちになみだかさか

づかいました。

3日め、中のうどん堂でうどんをたべ

ました。おみやげにうどんをかいました。ゆ

うがた、やうとおかあさんにあうことができ

ました。あうときはとてもうれしかつたけ

ど、なみだはでませんでした。かえりのくる

まのながで、ぼくが、

「やうとあえたね。」

というとおかあさんが、

「そうだね。」
といました。

ことのしやう学りよころは、なかないか
などおもっていたけど、ないてしまいました。
ほくは、なくのはしかたがないというきもち
があります。でも、なくとおかあさんがしん
ぱいします。おかあさんにしんぱいをかけた
くないので、ながれにがんばりたいきもちも
あります。おかあさんに、がんばっています
かたをみせたいです。どうしたらながなくな

るかいいっしょうけんめいかんがえました。
そして、きめました。こんどなきるうになっ
たら、このころの中で、
「おかあさん、がんばるー」
「なくのをかまんするー」

というつみょうとおもいます。
つぎのしやくほく業しやうは、らいおんで
す。そのときは、がんばってながないまふに
したいとおもいます。

＜指導者の言葉＞

本作品は、国語科の通年の単元「書いて伝えよう」で取り組んだ作品です。指導者は、本生徒が在籍する学級担任ではありませんが、日常の関わりから、本生徒のものの見方や表現方法に面白味を感じていました。本生徒は、長い文章を書いた経験がありませんでしたが、自分の気持ちを文字にして客観視することにより、自らを知り、理解する機会になると考え、作品を書くことを提案しました。

本作品を書く時は、次の手順に沿って指導しました。

- ① 時系列に出来事を並べる。
- ② トピックごとにどのような気持ちであったかを整理する。
- ③ 自分が今後どのような行動をとっていくのかについて考える。

本作品で大切にすることは、「本生徒の気持ちをありのままに書く」ということです。本生徒の気持ちを一つずつ確認しながら、少しでも違和感があればぴったり合う言葉を探し、齟齬がないように記す指導をしました。最後の段落には、「なくのはしかたがないというきもち」と、「なかなずにがんばりたいきもち」の相反する2つの感情がありながらも、このままではいけないという気持ちも存在することを素直に書いています。その気持ちの整理をするため、今後どうしたいのか、できることは何なのか等について指導者と具体的に考えました。

本生徒の持ち味である「豊かな言語表現」を生かすことにも留意しました。「なみだがあがってきそうになる」、「なみだをふさごうとしたけど、なみだがかった」等、本生徒の気持ちが手に取るように分かる表現を大切にしました。

作文を書くことを通し、本生徒は気持ちを言葉にし、自分と向き合いました。これまで自分の中ではっきりしなかった感情を丁寧に見つめました。この経験が、今後の本生徒の糧となり、これから先、壁にぶつかったり悩んだりした時に、「ことば」を表出することが彼を助ける選択肢の一つになることを願っています。